

田園風景が広がり、緑豊かな自然に囲まれた藤川地区。
農繁期ともなると、田植えに精を出す農家の皆さんの姿が、
そこかしこに見受けられます。
今回の特集では、そんな農村地域を、自分たちの手で守ろうと
活動している「藤川自然をまもろう会」を取り上げます。

農村の原風景を守るため

自分たちの手でやっぺんべえ

藤川自然をまもろう会の取り組み

まもりびと

田園の守り人



農道沿いの遊休地の一角
に大泉高校の生徒が育て
たパンジー 1,000 株を植
えました。通学の子もた
ちの目を、楽しませました



藤川自然をまもろう会
会長 田部井猛夫さん
Takeo Tabeta

活動を理解してくれ 協力体制の近道なんです

会の取り組みで農村環境を
よくするお手伝い

藤川自然をまもろう会では、国
の補助制度を利用して地域の皆さ
んの協力を得ながら、農村環境を
よくするお手伝いをしています。

活動内容は、主に開水路（水面
を持つ水路やその流れの区分）の
整備や傷んだ用水路の補修、遊休
地の有効活用などが挙げられま
す。活動を地域の皆さんに知って
もらう一環として「いも煮会」な
ども毎年10月に開催しています。

水路や農道の除草は保全管理の
観点から欠かせません。第一回目
として、今年は高島幼稚園駐車場



防草シート（幅2m）を100mにわたり張りました。
50m張るのに約3時間は、かかったといいます

南の道路と水路の間が、夏になる
と大きな雑草が生え視界や景観を
損なうことから、雑草を抑えるた
めの防草シートを張りました。

一方で地域を花で彩るため、藤
川育成会と藤川集落営農生産組合
とも協力してパンジーも植えまし
た。小学校や幼稚園・保育園から

も近いので、通学時や園児たちの
散歩の際、子どもたちに見てもら
えたことがうれしかったですね。

地区の皆さんの協力体制が
何より大切だと考えます

地区住民の皆さんに会の活動を
理解してもらうことが大切です。
地域の皆さんの協力は必要不可欠
ですからね。そのためにも「いも
煮会」などを通して、地域のコミュ
ニケーションを日頃から培う試み
もしています。会が発足して今年
で6年目。協力してくれる地域の
皆さんに何より感謝です。今後も
会の活動が、農村環境の維持改善
に寄与できれば幸いです。

藤川自然をまもろう会とは

農家の高齢化が進み、地域のつながりが薄れているなか、農地や農業用水路などの維持管理が先々困難になってくることが予想されます。そこで農林水産省では、平成19年度から「農地・水保全管理支払交付金」制度を創設。地域による農地と農業用水などの資源の保全管理と、農村環境の保全向上の取り組みに対して支援をしています。

藤川自然をまもろう会（役員14人）では、この制度を利用して地域の住民にも呼びかけ、平成20年度から活動を開始。計画の策定から実施まで行い、老朽化が進む農地周りの水路の長寿命化や水質・土壌など、農村の環境保全や景観を守る取り組みをしています。

平成24年3月にはその活動が評価され、会として県表彰を受賞しました。

●「農地・水保全管理支払交付金」制度については、役場産業振興課農政係（☎47-5025）まで



地区の皆さんも参加して、大規模な開水路の清掃活動を行っています。毎年大量のごみが水路にたまっています。その他に開水路の定期点検や台風・ゲリラ豪雨後の見回りも行います。稲作に欠かせない水利の確保の観点から、こうした地道な取り組みを行っています





藤川自然をまもろう会
副会長 赤坂赤城さん
Akagi Akasaka

農家と地域住民の連携・結束が 会の運営には必要不可欠です

農業の未来を見据えた
体制づくりが必要です

高齢化が進み農家の戸数も集約されているなか、農業環境を保全していくのはこれから先、難しくなってくると思います。

そのことを踏まえたうえで、行政の補助を上手に利用しながら、今のうちに地域住民の手で集落を支える体制を整えておくことが大切だと考えています。その意味でも、農家と地域住民が連携して活動する会の取り組みには、意義があると思います。

農地の保全管理の一環で遊休地を利用して、昨年は種から育てた



11月にカキナの苗500本を植栽。3～4月の収穫時期に地域住民の皆さんへ提供し、喜ばれました

カキナの苗500本を植える試みをしました。

それまで景観作物として菜の花を2年間植え続けていましたが、地域の人たちにも食べてもらえるカキナがよいのではと、植え付けを行いました。収穫時期を迎えた今年の3～4月には、地域の人た

ちがカキナを採りに来る姿も見受けられ、喜ばれましたね。

いも煮会や景観作物の植え付けといった会の活動を通して、地域の皆さんの顔を見ることができま

す。「誰々さん家の誰さんだよ」といったように、知らないよりは知っていた方が、交流を深めるきっかけになると思うのです。

会の活動はこれからも続くと思いますが、農家ではない人たちにも協力してもらおうからです。負担を考えて皆さんの声も聞きながら、進めていく必要があります。何より役員との連携、それに地域の皆さんとの結束が会の運営には、必要不可欠ですからね。



↑ふるさと公園(藤川)南の遊休地に毎年8月、そばの種をまいています。10月初旬頃に花が最盛期を迎えます



景観保全活動は、会の取り組みのひとつ。昨年は、パンジーやカキナなどを地域の皆さんと協力して植栽しました



交流を
深める

藤川地区の「いも煮会」



毎年10月に、地区と藤川自然をまもろう会の主催による、いも煮会が行われています。会場には、子どもからお年寄りまで集まり、交流の場にもなっています。



大人気のいも煮



←地元で収穫された「ゆめまつり」のおにぎり

取材を終えて 田園の守り人の存在

今回の特集では、藤川自然をまもろう会の活動を取り上げました。関係者の取材を通して見えてきたもの、それは地域ぐるみで農村地域を守ろうと立ち上がった人たちがいたということでした。

田部井会長は「私は農家ではないので、専門的なことは知りません。ですが計画書や書類づくりなどは私の担当。要は裏方なんです」と語っていました。

「適材適所で役員同士の連携を大切にしています」と赤坂副会長。自分の役割をしっかりと見据え、得意分野を生かした適材適所の連携が会ではとられていることを、取材を続ける中で垣間見たような気がします。

何よりお二人がもつとも強調していたのが、地域との結びつきでした。地域住民の協力なしには、この取り組み自体、立ちゆかなくなってしまうからです。より多くの人たちが快く参加してくれる土壌づくりが、これからは必要不可欠、課題でもあると言います。

地域コミュニティが希薄化しているといわれる時代、こうした地域ぐるみで農村を守ろうとしている行いは、未来へ向けた貴重な取り組みなのかもしれません。



照りつける太陽、麦穂を揺らすそよ風、そしていつも目にする田園風景。北保育園の園児たちは、元気に散歩に出掛けました

田園のある古里の道を 今日も誰かが歩いている

Country Road



緑に囲まれた自然豊かな古里。野鳥も時々訪れ、しばしの間その羽を休めます

取材協力●藤川自然をまもろう会

写真協力●赤坂光一さん(町の記録ボランティア)